



# RELIEUR

## ルリユール

古くからの職業として、ヨーロッパには本を治す「ルリユール」という職業があることを知っていますか？ヨーロッパで印刷技術が発明され、本の出版が容易になってから発展した実用的な職業なんです。日本にはこの文化はないんです。大切な本はいつまでもきれいにそばにおいておきたい、手放したくないものですね。今回はそんな「ルリユール」にまつわる本を紹介します。

### 『ルリユールおじさん』

いせひでこ作 理論社 2007



ルリユール、それは本をなおすお医者さん、「本をつなげる」という意味を持っています。とっても大切にしてた植物図鑑の本がこわれてしまった女の子、こわれた本ってどこに持っていけばいいんだろう？それならルリユールおじさんのところへもって行ってごらん。パリの街の一角。路地裏の小さな窓がある工房にルリユールおじさんはいます。こわれてしまった本は、ルリユールおじさんの手によってきれいに美しく蘇る！ルリユールの作業手順がいせひでこさんのスケッチであざやかにやさしく描かれています。文字は極力少なく、流れるようなスケッチは、ショートムービーをみているよう。大切な本は、あたらしく買い換えるのではなく、こうしてなおしてずっと手に持っておく。（大切でずっと読んできた本ってページの擦れ方や本の匂いや質感が、読んでいるうちに、手に馴染み、自分だけの本になっていく、愛着がわいてくる...そんな気がします。）本のいのちは何度でもよみがえるんだなあ...とてもすてきであったかい職業だなとおもいます。

いせひでこさんは、このルリユールの手仕事のひとつひとつをスケッチするために、実際にパリに行き、アパートを借りて何度もルリユールおじさんのところへ通い、スケッチさせてもらったんですって。ルリユールおじさんとの出会い、ルリユールおじさんのところで見えたことをかきとめたスケッチやエッセイ『旅する絵描きパリからの手紙』伊勢英子著 平凡社 2007もあわせてどうぞ。



### 『西洋製本図鑑』

ジュゼップ・カンブラス著

市川恵里訳 岡本幸治日本語版監修

雄松堂出版 2008

さきほど紹介した『ルリユールおじさん』のなかで、ルリユールおじさんが本をとじなおすために一度ばらばらにして、またもう一度つなげて本にする場面が出てきます。普段あなたが開いている本はどうやってできているんでしょう。もっと知りたくなった人はこの図鑑をどうぞ。本の修復、ルリユールのことも知っていますよ。わたしも大学のころ、絵本をつくったことがあるのですが、そのときに、実際に製本をしました。製本の作業は、絵を書く事よりも大変で、力も集中力もいる作業でした。そのときの教授の、「製本作業は、業者にまかせることも多いけれど、やっぱりこうして自分でつくった本を自分で製本してはじめて、自分の本になるのだ」という言葉がいまでも心に残っています。確かに、自分の書いたページの1枚1枚が繋がっていき、だんだんと1冊の本になっていく過程はとてもわくわくし、達成感があり、できあがったときは感動しました。

1冊の本ができあがっていく様子、あなたものぞいてみませんか。

